

昭和59年度帰国研修員巡回指導

貿易実践指導者コース 帰国研修員巡回指導班報告書

昭和60年 3月

国際協力事業団
研修事業部

703
298
TAD

研 習
J. R.
85-16

JICA LIBRARY



1024590[0]

国際協力事業団	
受入 月日 '85. 7. 23	703
	29.8
登録No. 11800	IAD

はじめに

この報告書は、国際協力事業団が実施した集団「貿易実践指導者コース」に参加した帰国研修員に対するフォロー・アップ事業の一環として、帰国研修員の所属機関等を訪問し、現地での技術指導を行うとともに、あわせてわが国で実施した研修の成果を測定し、当該研修分野に係る当該国の技術的問題点及びニーズを把握するため、昭和59年9月25日から10月14日までの20日間、ブラジル及びパラグアイの2ヶ国に派遣した巡回指導班の報告をとりまとめたものである。

本報告書により、当該分野における両国の実情、帰国研修員の活動状況、彼らが抱えている諸問題及び研修にかかる要望事項等について関係各位のさらに深いご理解をいただき、今後の研修コースの改善に資すれば幸いである。

なお、本件の実施にご協力を賜った外務省、文部省、通商産業省並びに現地において数々のご指導とご協力を賜った在ブラジル、パラグアイ日本国大使館及び関係機関の皆様に深甚なる謝意を表します。

昭和60年4月

研修事業部

部長 宮本守也

目 次

I 指導班の構成	1
II 日 程	1
III 活動報告	3
1. ブラジルとパラグアイの経済事情	3
(1) ブラジル	3
(2) パラグアイ	4
2. 巡回指導の成果	5
3. 研修コースに関する評価と希望	6
4. 研修コースの採点についての若干のサジェッション	8
添付資料	
1. 帰国研修員面会者リスト	10

I 指導班の構成

村上 敦 神戸大学経済学部教授
 佐野 吉雄 (財)神戸国際交流協会理事
 菊池 賢治 国際協力事業団兵庫インターナショナルセンター職員

II 日程表(昭和59年9月25日～10月14日)

月/日	曜	時間	訪問先及び業務事項
9/25	火	17:20	成田発(JL062)
26	水	13:30	ロスアンゼルス発(PA441)
27	木	07:35	リオデジャネイロ着(JICAリオ支部の出迎を受く)
		11:00	リオデジャネイロ日本総領事館表敬(梶田領事館)
		15:00	ブラジル銀行(第1回研修員Sr. Bezerro氏と懇談)
28	金	10:00	石川島ドブラジル(業務概要及び社内教育制度説明並びに見学)
		14:30	JICAリオ支部報告(野和田支部長・須田課長)
29	土		資料蒐集
30	日	12:00	リオデジャネイロ発(RG321)
		12:55	サンパウロ(以下SPとする)着(JICA SP支部の出迎えを受く)
10/1	月	09:30	在SP日本総領事館表敬(色摩総領事引見)
		11:00	JICA SP支部にて予定等打合せ(榎田支部長・山下課長・小池職員他)
		14:00	東京銀行SP支店(平沼副頭取より伯国金融事情等につき聴取)
2	火	09:30	JETRO SP事務所(上杉所長・宇野次長より伯国貿易事情につき聴取)
		14:00	大蔵省SP税務局(第1回研修員川下氏と懇談)
		16:00	ブラジル銀行(第5回研修員Santos氏と懇談)
3	水	10:00	セミナー開催及びSP地区帰国研修員と討論及び懇談
		15:00	在SP日本商工会議所にて講演「開発途上国の開発戦略」
4	木	09:00	アルコール精製工場見学(在ピラスヌンガDEDINI社=川崎重工との合併会社「石油問題に関する伯国の取組姿勢について」)

月/日	曜	時 間	訪 問 先 及 び 業 務 事 項
10/ 5	金	08:30	サントス商業貿易港見学(「伯国の貿易の現状」)
		16:00	JICA SP支部報告
6	土	10:15	サンパウロ発(RG902)
		13:00	アスンシオン着(アスンシオン支部大石職員の出迎えを受く)
		16:00	日程打合せ(於ホテルHUSA)
7 8	日 月	08:00	イグアス移住地及びイタイプダム見学(「パラグアイ国経済における移住者の寄与及びイタイプダムの同国経済に与える影響」)
		17:00	アスンシオン支部表敬(小島支部長)
9	火	09:30	商工省技術官房局長・次官及び商工大臣表敬(第10回研修員 Recalde氏と懇談)
		08:30	勸業銀行表敬(第6回研修員Camacho氏と懇談)
		11:00	日本国大使館表敬(山口大使引見)
10/10	水	09:30	外務省次官表敬(Miss Cabrera氏(第9回研修員)と懇談)
		10:00	外務省研修所見学
		17:00	セミナー開催
11	木	10:00	第7回研修員企画庁Miss Castillani 病気見舞及び懇談
		11:00	アスンシオン支部長報告
		12:00	帰国研修員同窓会との昼食会
		16:15	アスンシオン発(RG903)
12	金		ロスアンゼルス泊
13	土	13:00	ロスアンゼルス発(JL061)
14	日	16:15	成田着

Ⅲ 活 動 報 告

われわれは、昭和59年9月から10月にかけて、Ⅱに述べた日程に従い、ブラジルおよびパラグアイの2ヶ国において「貿易実践指導者研修コース」にかかわる“帰国研修員巡回指導”を実施した。帰国研修員との面接の結果の詳細は後の記述にゆづり、ここでは(1)巡回指導の成果、(2)本研修コースに関する研修員の評価と希望、(3)今回の巡回指導を通して考えられるコース改善についての若干の示唆、を中心に要約的な報告を行なうこととする。しかしながら、その前にわれわれが訪問したブラジルとパラグアイの経済についてわれわれがえた印象を明らかにし、それとの関連で「貿易」の重要性を展望しておくことが必要であろう。

1 ブラジルとパラグアイの経済事情

(1) ブ ラ ジ ル

広大な領土と資源（自然資源と人的資源）に恵まれているブラジルは、その大きな潜在的成長の可能性のゆえをもって、常に「明日に開く大国」という期待を担ってきた。事実、1960年代の高度成長はその夢の開花に近いことを思わせるに十分であったのである。しかしながら、その夢を乗せた重化学工業化のための投資が石油危機による外部環境の悪化と軌を一にした結果、今日では世界最大の債務国として、その債務の返済のためにIMFから課せられた厳しい緊縮政策の下で呻吟することを余儀なくされている。財政赤字の縮小、インフレ率の圧縮、貿易収支の改善のために採用されたデフレ政策と人為的な実質賃金の切下げ、それに基づく生活水準の低下は深刻な治安の悪化を招いている程である。

もっとも、近年においてはこうしたデフレ政策の結果もあって貿易収支は黒字に転じ、その改善のテンポは予測値を上回っている。輸入も原油を中心に大幅に削減されたが、輸出も増加しつつある。しかしながら、この輸出増加についてはこれを如何に評価するかに関し相異なる2つの見解がブラジルの内外においてみられるのである。その一つは楽観論であり、今回の厳しい内外環境の下でようやくブラジルにも真剣な「輸出マインド」が醸成され、労働生産性の向上を基底とする真の国際競争力の強化が意図されつつあるとするものである。この見解は、(1)これまでの輸入代替的工業化の成果が現れ、大幅な輸入削減が必ずしも輸出拡大のためのボトル・ネックとはなっていないこと（輸出のための投入財のかなりのものが国内で生産可能であること）、(2)重化学工業化に関連し膨大な資金を投入して建設されたインフラストラクチャーや生産設備がやがて具体的に生産力化し、これが次の輸出拡大につながること、といった見方によって補強されている。いま一つは悲観論であり、現在の輸出拡大は、(1)為替相場のマニピュレーション（インフレ率を上回る率でのクルセイロの切下げ）、(2)莫大な輸出補助金の供与によってつくり出された「みせ

かけ」のものであるし、(3)国内のデフレ政策による企業の輸出ドライブがもたらした「一時的」なものであるとするものである。この見解によれば、計画通り輸出補助金が削減され、国内治安の回復のために緊縮政策がやがて再度成長政策に転じるとともに輸出は頭打ちになり、減少すらすらであるということになる。

こうした楽観論と悲観論のいずれが正しいかが判明するためには、いりまでもなく、なお時間が必要であろう。しかしながら、社会的不安の激化がこれ以上の引締め政策の継続を許さないことを別としても、ブラジルには、(1)極めて非能率的なパブリックセクターが多数存在し、これらが肥大化していること、(2)寡占体制が支配的で、本来的に競争的体質が欠如していること、(3)国民的統合がみられず、政府と国民との間に大きなギャップが存在すること（国民からみると膨大な累積債務などあざかり知らぬことであり、刻苦精励してこれを返済しようとする気構えがみられない）などを考慮すると、事態が楽観論の如く推移するには多大の困難が存在するようと思われる。

しかしそうはいっても、ブラジルにとって輸出の振興を中心とした貿易黒字の創出によって累積債務を長期的に返済していくことが至上の課題であることにはかわりがない。そして、まさにこの点に関連して、本研修コースがブラジルに対してもつ意味が存在するのである。戦前、戦後を通し比較的最近まで輸出振興一筋に国民の総力を挙げて努力を積み重ね、今日の経済的繁栄を迎えたわが国の経験は、その政策や制度を含めて、ブラジルの貿易指導者にとり大いに参考となることであろう。

(2) バラグアイ

ブラジルがラテン・アメリカの「新興工業国」(NICs)であるのに対して、これに隣接するパラグアイはいまだ農牧畜業を中心とする「経済的小国」である。ブラジル、アルゼンティンという大国の影響を強く受けて最近ではかなりの物価騰貴と通貨ガラニの価値低下を経験しているけれども、その経済は農業に基礎を置くだけに極めて安定的に維持されている。わが国にほぼ等しい領土をもちながら人口が僅かに300万人という国では工業化圧力も小さく、工業は搾油、製材、家具、繊維を数える程度である。農牧省に比べて商工省はその予算規模も小さく、商工業に関する統計整備も不十分であるときいた。ブラジルとの間で合弁のイタイプー発電所が建設されているが、その電力に対する需要はパラグアイ国内には存在しない。パラグアイ側のもくろみはブラジルへの売電収入にある。公式統計によるとパラグアイの輸入は輸出を大きく(約2倍)上回り、その貿易赤字はわが国を始めとする先進諸国からの経済援助によって埋め合わされているが(ちなみにわが国はパラグアイからみて最大の援助供与国である)、全く海をもたぬ内陸国パラグアイにとって公式の貿易統計は現実の輸出入(密輸出入を含めた)のほんの一部しか捉えていないということである。

30年にわたって独裁政権を保持してきたストロエスネル大統領の下政情は至って安定しており、人々の大統領に対する尊敬の念は極めて厚いようにみうけられた。ブラジルと異なって治安は良好であり、落ちついた雰囲気のある首都アスンシオンは夜間でも一人歩きできる程である。前述したように、わが国が最大の援助供与国であること、それに国の基幹をなす農業部門においてわが国からの移住者の貢献が大きいことのために、政府の官僚を含めて人々はこの上なく親日的である。われわれは訪問した各方面でこれら2つの事柄について多くの謝辞を耳にした。

ところで、これまでに前述したように、パラグアイも大幅な対外赤字に悩まされており、援助受入れに伴う累積債務を背負っている。これを解決するためにはパラグアイにとっても輸出振興が不可欠である。もともと、ブラジルについては一次産品から軽工業品、それに重化学工業品（航空機や自動車、さらにはアルコール蒸留技術を含む）までが輸出可能であるのに対し、パラグアイの輸出可能商品は当面農畜産物に限られている（人口300万のパラグアイでは600万頭の牛が飼育されている）。しかし、それには将来家具や繊維といった軽工業品が加えられることであろう。こうした方向に輸出可能商品のリストを拡大しながら、それらの輸出振興に努力することはパラグアイにとっても至上の課題であるといわなければならない。

この点、パラグアイからの参加者に対しても本研修コースは大きな意味をもっている。とくにわが国が農産物を輸出していた時代の経験、それに今日巨大な農産物を輸入する国となったわが国の政策や制度はパラグアイにとって大いに参考になる筈である。

2 巡回指導の成果

さて、われわれは上記の如き経済的背景をもつ両国で巡回指導を行なったわけであるが、その成果は極めて大きかったと評価することができる。

まず第1に、われわれはブラジルで5名、パラグアイで5名の帰国研修員に面接したが、前者は帰国研修員13名中の5名、後者は7名中の5名であり、その比率は高い。もとよりこれら多数の研修員に面会できたことは前もってアレンジに尽力された現地JICA関係者の並々ならぬ努力によるところが大であるが、同時に研修員の側でわれわれの訪問を積極的に歓迎する姿勢が存在したことの結果でもある。ある研修員は自らの意志で空港まで出迎えてくれたし、ある研修員はわれわれの到着直後にわざわざホテルを訪問してくれた。数名の研修員は自らパーティーを企画し、われわれに楽しい一夕を用意してくれた。また、われわれが対象とした帰国研修員のみならず、かつていずれかのコースで訪日した経験をもつ「帰国研修員同窓会」の人々もわれわれを熱烈に歓迎してくれた。とくにパラグアイにおいてはわれわれ一同、同窓会主催のパーティーに招かれたほどである。

第2に、各研修員を通してその上司や同僚、政府、民間の貿易関係者多数と面談し、両国の貿易事情、各種関連機関の組織や機能について多くの情報を入手することができた。各帰国研修員は率先して自らの職務やその変遷について語り、積極的にわれわれを上司や同僚に引き合わせてくれた。かれらは本研修について謝辞を述べるとともに、各帰国研修員の今日のポジションの重要性を説明し、併せてかれらが所属する貿易関係機関の活躍ぶりを（時には写真やスライドを交え）詳細に紹介してくれたのである。現地で直接に入手しえたこれらの情報は、後にも述べる如く、今後の本コースの運営を考える上で極めて貴重な資料である。

第3に、われわれがサンパウロとアスンシオンにおいてそれぞれ開催した「セミナー」が大盛況であった。サンパウロにおけるセミナーは帰国研修員中心のものであったが、「最近の日本貿易と日本経済」「神戸の近況」についてのわれわれの話題提供に対し、各帰国研修員は活発に反応し、とくに日本の貿易政策に関しては帰国研修員自らの体験を踏まえてわが国のNTBに対する鋭い批判が提起された程である。アスンシオンにおけるセミナーはブラグアイ商工省の大会議室で開催されたが、商工大臣のお声がかかりということもあって、アスンシオン大学教授を含む50～60名の人々が参集し、商工省次官の司会で進められた（きくところによるとブラグアイのテレビ局が2社セミナーの様子をニュースで流したということである）。ここでわれわれは日本の経験を土台に貿易と開発に占める中小企業の重要性について論じたのであるが、このテーマはブラグアイの将来との関係において少なからぬインパクトを与えたものと思われる。

そして第4に、これはわれわれの本務からははづれるけれども、巡回指導のあい間をぬって日本からの移住者、日系企業の現地駐在員に面会し、日系企業を見学する機会に恵まれるとともに、サンパウロの日本人商工会議所において「発展途上国の開発戦略」について講演し、相互に意見を交換するチャンスをもつことができた。これはわれわれがブラジルやブラグアイについての理解を深めるまたとない機会となったのである。

以上の如き諸点において、われわれの巡回指導はそれ自体大きな成果を収めたと考えられる。

3. 研修コースに関する評価と希望

それではわれわれが面談した帰国研修員はかれらが参加した「貿易実践指導者コース」についてこれをどのように評価し、その将来の改善についてどのような希望をもっているであろうか。

まず、評価についてはこれが極めて高いということができる。10年以前に来日したいわゆる第1回生もわれわれのことを良く記憶しており、神戸をなつかしむことしきりであった。個々の講師やささいなパーティーまでかれらの記憶は鮮明であり、かれらの語り口を通じて

われわれはその努力がむくわれていると痛感した。かれらはわれわれが把握していた以上に独自で神戸の街や市民にとけ込んでおり、それらについて数々のなつかしい良い思い出をもっているようである。「是非もう一度神戸に行ってみたい。是非再訪の機会を与えてほしい」という言葉は殆んど全員が口にした。コースの編成それ自体についても「パーフェクト」であるという評価があった。神戸での研修の後、他国へ出かけ同様の研修を受けたものも「神戸での研修が最も印象的で効果的であった」と述べている。

また、こうした個々の研修員の神戸での好印象がブラジルやパラグアイの地でいわゆる「日本びいき」をつくり出し、かれらの口を通じて「好ましい日本のイメージ」が広く友人や職場の同僚に拡散されているという事実がある。上司や同僚のなかには「かれ（帰国研修員）からしょっちゅう日本のことを聞かされる」とうんざりしたように、しかし、嬉しそうに語るものがあつた。このイメージの拡散効果はとくに重要であると思われる。

もとより神戸での研修そのものが直接帰国研修員の現在の業務に眼にみえて役立っているというケースは、かれらの帰国後のポジションの変化等からみて（添付資料Ⅰ参照）、決して多くはない。しかし、広い意味で、また間接的に、かれらの経験はかれらの今日に大きく貢献しており、ブラジルやパラグアイとわが国との結びつきの強化に大きく寄与しているのである。しかし、次にみる如く、コースに関するいくつかの改善希望のあることは事実であるが、われわれは帰国研修員との面談を通じ、「われわれのやっていること」に強い「自信」をいざだくことができた。

さて、本コースについて一般的に高い評価を下しながらも、なお、帰国研修員が口にした希望や注文には次の如きものがあつた。

- (1) これは上述した「高い評価」と裏腹のものであるが「再度日本、そして神戸を訪問したい」という希望が圧倒的に多い。これは帰国後一定期間経たものに「再研修制度」を適用してほしいという声でもある。
- (2) 母国出発以前に日本や神戸、さらには研修コースの概要について general orientation がなされたなら、限られた期間の研修をより効率よく受けられたという意見がある。
- (3) 研修期間について4カ月はいささか長すぎるという意見がある。これは研修員の家庭の事情にもよるのであろうが、2～3カ月への短縮を希望するものである。
- (4) 年1回ではなく年2回開催のシステムとしてより多くの研修員を呼んでほしいという意見がある。
- (5) 研修内容に関しては
 - (i) さらに企業見学の機会をふやしてほしい。
 - (ii) 国際的マーケティングの講義がほしい。
 - (iii) 日本の貿易システムについてもっと知りたい。

(V) 商社でのトレーニングの機会を与えてほしい。

という意見がある。

(6) 帰国時に研修した項目や内容について詳しくしるしたサーティフケートがほしいという希望がある。帰国後のポジション決定や昇任人事について研修内容を具体的にしるした研修終了証明書が入用であるというのである。

(7) これは研修員ではなくブラグアイの政府当局から寄せられた声であるが、研修コースの「現地開催」を希望する強い意見がある。これはいわゆる専門家派遣と関係するのであるが、複数の講師が現地（ブラグアイ）入りをし、ある程度現地の実情やニーズを把握した上で、それに適切なセミナーや講義をしてほしいという希望である。これには、もしこれが実現しうるなら、ブラグアイ側は最大限の協力をおしまないという付言があった。

こうした希望や注文は研修制度そのものにかかわる問題と本コース運営にかかわる問題に大別できるのであるが、われわれとしては今後帰国研修員のこうした希望に応じうるよう格段の努力をせまられているように考える。

4. 研修コースの将来についての若干のサジェッション

上述した帰国研修員の希望や注文がそれぞれにこれからの制度のあり方やその運営について示唆的であることはいうまでもないが、ここではわれわれが今回の巡回指導を通じて実感した一つの重要な問題点について述べておきたい。今回のわれわれはブラジルとブラグアイという2ヶ国を訪問したのであるが、これらの国の経済状態は最初にも指摘した如く大きく相異している。貿易に関していえばブラジルは一次産品から重化学工業製品迄広範な輸出可能財をもったNICsの一つである。これに対し、ブラグアイは当面のところ農牧畜産品にしか輸出機会をもっていない農業国である。これら2国の当面している貿易問題、必要としている輸出促進の対象や輸出振興の手段は全くのところちがっているといつてよい。一方の国に大いに関心のある事柄ももう一方の国にとっては全く関心の外にある事柄であろう。ブラジルにとってわが国の経験、わが国の貿易制度、わが国の各種産業の現状が広く関心をひくであろうが、ブラグアイにとっては少数の一次産品についての輸出機会の有無、その輸出競争力強化の方策等限られた分野でのむしろより深い研究の方がはるかに有益である。

ことは貿易実践を離れるけれども、われわれがブラグアイでのセミナーで取上げた中小企業問題に例を借りるなら、ある国にとっては農業に基礎を置いた農村工業（アグロインダストリー）の振興が焦眉の急であろうし、ある国にとっては繊維や雑貨といった軽工業分野での中小企業の育成が当面の課題であろう。さらに重化学工業段階に迄踏み出そうとしているNICsにとっては、重化学工業を底辺で支える下請中小企業についてわが国から学ぶべき点が多いであろう。このように、等しく発展途上国といっても、その国の置かれている情況

如何によって関心の所在と学ぶべきターゲットは大きく相異している筈である。

ともあれ、われわれは今回の巡回指導を通して改めて国情の相異、それから派生する研究ニーズの相異を痛感した。これに対し、われわれが神戸で、あるいは他の所で、用意してきた研修のメニューは余りにも通り一ぺんのもではなかったであろうか。個々の国の緊急ニーズに対するわれわれの対応には、予算その他の制約要因が多いとはいえ、隔靴搔痒の感なしとしないのである。前述の如くパラグアイにおいて研修コースの現地開催が強く要請されたこともこのことと無関係ではないように思われる。

「国を異にするにつれて事情が違い、ニーズが違う」という当然のことを正当に受けとめるならば、われわれは研修コースに複数のメニューを用意するという対応を考えなければならぬ。このことは研修コースの共通テーマに関する一般的概論を展開することとならんで、いくつかの具体的・特殊的サブテーマを用意し、各サブテーマ毎にきめ細かいカリキュラムを用意するという必要とするであろう。講義やセミナー、企業見学や企業専門家との意見交換等もこのサブテーマ毎に立案されてしかるべきである。研修員は自らの希望でいずれかのサブテーマを選択し、その問題について講師陣の助言をえながら自ら徹底的な研究を行い、その研究成果について最終レポートを作成するのである。

今日の一般的なカリキュラムを作成するだけでも大変な難事である。それを複数カリキュラム作成へ拡大することに伴う困難は予想に難くない。しかしながら、これからの経済協力にとって「国別アプローチ」や「きめの細かさ」がなによりも必要であるという事実もまた否定できないのである。われわれが今回全く異なった経済をもつ2ヶ国を訪問したということは、まさに、こうした「きめ細かさ」の必要性をわれわれに実感させるに十分であった。こうした実感に裏打ちされたわれわれのサジェッションがなんらかの形で将来生かされるならば、われわれにとって望外の喜びである。

帰国研修員面会者リスト

面接日	氏名		現職	印象・意見・提案その他
	(研修年度)		(研修時の所属)	(備考)
リ ジ ャ ・ ネ イ ・ デ ・ ロ	銀行 9/27	Mr. JOSE ALBERTO BEZERRA (1974年)	ブラジル銀行 海外業務統轄室長代理 (貿易部輸入調査課技術指導員)	日本での研修は非常によい経験だった。 満足し、感謝している。
サ ン バ ウ ・ バ ロ	税務局 10/2	Dr. AKIO KAWASHITA (1974年)	大蔵省 サンパウロ市税務署長 (大蔵省課税専門官)	研修は終始よい印象で過した(日本の英語に馴れるまで、1カ月ほどかかったが…)特に興味をひかれたプログラムは、 <u>税関業務</u> 、 <u>コンテナ・ヤード</u> 、 <u>輸出入システム</u> で、大変参考になった。 企業、施設の見学コースをふやすとよいと思う。 (3年前に観光で訪日した由)
	銀行 10/2	Mr. HELVIO ANTONIO SANTOS (1978年)	ブラジル銀行 外国貿易部貿易振興・マーケティング課スーパーバイザー (貿易部課長補佐)	研修プログラムは広範囲の項目に亘っていて、申し分のないものだったと思っている。 貿易実務の知識が必要なことを痛感させられた。貿易商社などにおいてトレーニングを受ける(1週間くらい)ようなコースを設定できれば、有効・実用的だと思われる。 再度の研修訪日を熱望している。 ブラジル文部省に経歴・資格登録するための添付書類として、研修受講証明書(ディプロマ)が必要につき至急入手したい。 本年、スーパーバイザーに昇格。貿易相談業務ならびに統計・資料業務の監督責任をもたされている。
	セミナー 会場 10/3	Mr. ATSUSHI NISHIKAWA (1983年)	SUNNYVALE社 国際部部长 (サンパウロ州商工科学技術局国際部長)	研修コースは、もっぱら日本の貿易システムに関する内容に徹した方がよいのではないかと思う。 研修期間は2カ月でよいと思う。 オリエンテーションについては、或る程度までのことは、研修員が出発するまでに事前連絡することができるのではないだろう

面接日	氏名		現職	印象・意見・提案その他
	(研修年度)		(研修時の所属)	(備考)
サンパウロ				うか。 研修帰国後退官し、SUNNYVALE社入社。外国貿易に関する一切の業務を管理している。
セミナー会場	Mr. MARCOS MINAGUCHI (1982年)	ブラジル銀行リオ・デ・ジャネイロ店 融資管理局アシスタント (ブラジル銀行サンパウロ店 外国貿易管理局)		得がたい経験をさせて貰って、楽しく過ごすことができました。 サンパウロからリオ・デ・ジャネイロ店に転勤になった。 (セミナー当日、リオ・デ・ジャネイロから出てきて出席してくれた)
ア ス ン シ ョ ン	商工省 10/9 セミナー 10/10	Dr. ROBERT RAMON RECALDE (1983年)	商工省 国際経済取引班経済調査官 (現職に同じ)	学ぶこと多く、勉強になった。 研修の場所が神戸であったことは、日本の地方都市の実状がわかって幸いだっただ。 今回、JICAミッションのセミナーが開催されるに当たって、会場設営、開催通知、参加者の人選など一切の準備を、商工大臣のお声がかかりで担当させられたことは、自分が日本で研修を受けた結果に匹敵しないと考えている。 研修期間は3カ月が妥当。 10年後ぐらいにあらためて日本の諸事情に触れてみたいと思う。再研修制度は考えられないだろうか。 (セミナー準備のため深夜まで頑張っていた)
銀行	10/9	Lic. FRANCISCO IGNACIO CAMACHO (1979年)	ブラグアイ勸業銀行 総務局翻訳課英語翻訳官 (外国為替部輸出入課)	研修で多くのことを学んだ。なつかしく思い出している。 当行の職員が1人でも多く研修に参加できるようになることを望む。 今年、翻訳課に転属となった。公文、証書類(信用状、融資契約書、取立文など)の翻訳業務を担当している。 (10月9日、空港にミッションを出迎えに来てくれたが、混雑のためあえなかった)

面接日	氏名		現職		印象・意見・提案その他	
	(研修年度)		(研修時の所属)		(備考)	
ア ス ン シ ョ ン	外務省 10/10	Dra. CLELIA VICTORINA FARINA (1982年)	外務省 外交官研修所(ディプロマティ ック・アカデミー) 渉外担当次 長 (公共土木省貿易部秘書)		<p>研修滞在はすばらしい毎日だった。一生 忘れることはないであろう。</p> <p>バラグアイからの参加人員を増やしてほ しいと思う。</p> <p>将来もう一度日本を訪れてみたい。</p> <p>土木省から外務省に移って、研修所の次 長として多忙な日を過している。</p>	
	ホテル 10/6 懇談会 会場 10/10	Dra. VICTORINA LOPEZ DIAZ (1982年)	アスンシオン市監査部 (商工省外国貿易部)		<p>研修を通して幾多のことを見聞すること ができ、大変感謝している。</p> <p>沢山の人が日本を訪れるべきだと思う… おおいに刺激され、得るところが少なくない と思うので…。</p> <p>日本はまことに魅力的な国。再度の訪日 を切望している。</p> <p>(10月6日、ミッション到着の夜、ホテル に訪ねてきてくれた)</p>	
	自宅 10/11	Dra. MIRTA W. CASTELLANI R. (1980年)	企画庁 外国貿易部門コーディネーター (同上)		<p>研修コースは非常によくできていて、不 要または不足と思われるプログラムは何一 つなく、大変満足した。</p> <p>村上先生にお会いできてまことにうれし い。当時のことがなつかしく思い出される。</p> <p>こんど日本に行く機会にめぐまれたら、 日本の公共機関のことを調べてみたいと思 う。</p> <p>(病院から退院してきたばかりだったので、 見舞かたがた自宅を訪ねた)</p>	
		その他の意見			<ul style="list-style-type: none"> ○ ジェネラル・オリエンテーションと日 本語会話は講座プログラムと併行的に行 う方がよい。 ○ 研修員が相互に理解し合うため、カン トリー・レポートをプログラムの最初の 段階で実施するのがよいと思う。 ○ 研修員それぞれの国の産品に関してマ ーケット・リサーチをする講座の設定。 	

面接日	氏名	現職	印象・意見・提案その他
	(研修年度)	(研修時の所属)	(備考)
	その他の意見 パラグアイ外務次官より		<ul style="list-style-type: none"> ◦ 貿易に関する印刷物・資料の提供 (帰国研修員に対して) ◦ 現地研修(専門家の海外派遣)の実施

